

当の穀物を必要とする。そして日本の場合、国内で飼育している食肉用家畜（牛・豚・鶏）の飼料用穀物の約65％を米国など外国からの輸入に依存している。

これらは、21世紀の世界の食糧問題が「配分と流通」の問題、すなわち適切な国際的配分と流通（貯蔵を含む）に関する国家や国連（国際社会）の政戦略（ポリテイコ・ストラタジィ）の問題であるとともに、人類の食生活における穀類（米、小麦等）・芋豆類（ジャガイモ・大豆等）・肉類（獣・魚）の黄金律（適切な配分比率）と料理的結合の問題である。

そこで——、その主食としての可能性と限界はともかく、ジャガイモの優れた特色を活かし、他の基幹食糧と結びつける多様なレシピを創出し、世界の食糧問題の解決に役立つ21世紀のパルマンティエ風「知恵と努力」が期待される。

ちなみに、主要食糧の世界総生産量（1999年国連統計）は、米・小麦・とうもろこしが

各6億トン（約、以下同）、ジャガイモ3億トン、サツマイモ1.3億トン、キャッサバ1.6億トン、大豆1.5億トン、豚肉0.88億トン、牛肉0.5億トン、鶏羽数140億羽、牛乳4.8億トン、鶏卵0.48億トンで、ジャガイモの世界生産量は1986年の2.8億トンから逐次増加傾向にある。

日本のジャガイモ年間生産量（1999年）は340万トンで、世界の約1.2％にあたる。そして、国民1人当りの年間消費量は24kgで、ドイツ人の消費量78kgの1/3である。

世界でもっともジャガイモを食べているのはポーランド人で年間137kg、ついでロシア人が118kg、英国人が110kg、ドイツ人78kg、フランス人67kg、米国人62kg、イタリア人40kgである。

なお、20世紀中期以降、英米日のジャガイモ消費量は上昇傾向、ドイツ、ポーランド、ロシアは下降傾向にある。

（完）

伸びるアジアでのジャガイモ生産

欧米での食生活に欠かせないジャガイモですが、いま世界での生産事情には大きな変化がみられます。中国は最大の生産国で、年間生産量5535（万トン、世界の18.8％、以下同）で、2位の、ジャガイモの国ともいえるロシアの3120（10.6％）を大きくひきはなしています。そして第3位はインドの2250（7.6％）で、実に1、3位とアジアの国が占めるに至りました（FAO、1999ほか）。欧米各国でもジャガイモは重要な農作物であり食物ですが、その生産は横ばいか、やや減少気味となっていて、とくに若い世代での食の多様化がみられます。

年間1人当り消費量では、いぜんとして欧米諸国が多く、137～40kgであるのに対し、アジアでは中

国45kg、インド25、日本23、と低くなっています。日本・韓国をのぞくアジアの国では、多くは副食物として、あるいは主食兼用として、また家畜の飼料用とされていますが、中国では乾燥馬鈴薯など加工もはじめられています。アジア各国では、生活スタイルの欧風化にともなって、ジャガイモの消費も急増し生産量も年々増加の傾向にあります。

いまなお世界のほぼ半ばを産するヨーロッパでも、相当量のジャガイモが輸入されます。長期貯蔵できるジャガイモですが、やはり新鮮なものが好まれ、冬から春にかけて生産できる地中海沿岸諸国では、輸出を目的として栽培され、また中国東北産のものは極東ロシアで好評を得ています。（編集部）